様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６８２０

研究課題名（和文）中国語北方方言における韻律構造の変化過程

研究課題名（英文）Changing process of prosodic structures in Chinese northern dialects

研究代表者
八木　堅二（Yagi, Kenji）

国士舘大学・政経学部・講師

研究者番号：６０７７１１０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中国語北方方言における韻律構造の変化過程を明らかにすることを目的とする。北方方言の代表的地点を複数選び単音節声調・連読変調・軽声・イントネーションなどに関する音韻・音響調査を行いミクロレベルの変化を跡付けるとともに、中国全土を対象とした言語地図を作成し、マクロレベルでの考察を行った。さらに他の韻律特徴や文法現象との関連を検討し、中国語韻律構造全体が通時的・地理的に変化する様相の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では軽声を中心とする重要な韻律現象の中国全体の分布状況を示し、その変化を言語地理学的に論じ、マクロレベルでの変化をミクロレベルでも裏づけるために複数地点においてフィールドワークを行った。ミクロとマクロの双方の視点から論じる研究手法は中国語方言においてまだ適用例が少なく、開拓的な意義を有しており今後の展開も期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the changing process of prosodic structures in Chinese northern dialects. Conducting phonetic and acoustic surveys of monosyllabic tone, polysyllabic tone, light tone and intonations, etc.,traced changes on the micro level. And creating linguistic maps for the whole China, I made a discussion at the macro level. Furthermore, I examined the relationship with other prosodic features and grammatical phenomena, and clarified parts of the changing aspect of the Chinese prosodic structure.

研究分野：中国語方言

キーワード：中国語　北方方言　韻律　軽声

１．研究開始当初の背景

言語のリズムは大きく音節拍と強勢拍に二分される。孤立語的特色の強い中国語は個々の音節がリズム単位を担う音節拍言語の典型とされるが、特に北京語などの北方方言においてはストレスアクセントの発達が見られ、複数の音節がまとまってリズム単位を構成する強勢拍言語へと変化している可能性がある。これと並行して北方方言では声調体系の簡素化が進行しており、韻律構造の大規模な転換が進んでいると考えられる。中国語の韻律構造の転換に関連する枠組として橋本萬太郎の『言語類型地理論』を再検討するとともに、具体的な変化の過程を跡付けていく必要がある。

２．研究の目的

本研究は中国語北方方言における韻律構造の変化過程を明らかにすることを目的とする。韻律的特徴の中で、音声の線状的な配置に関与するリズム構造は強勢拍と音節拍に大分されるが、中国語は特に北方方言で強勢拍と関連する可能性のある軽声の発達が見られる。本研究はまず北方において保守的な方言と革新的な方言の境界付近にある方言を対象として音韻･音響調査を行い、ミクロレベルでの変化を跡付けるとともに、中国全土を対象とした言語地図を作成し、マクロレベルでの推移を明らかにし、その上で他の韻律特徴との関連を検討し、中国語韻律構造全体の通時的･地理的変化の解明を目指す。

３．研究の方法

本研究の方法は主に臨地調査による音声データの収集と分析、周辺方言との比較検討および言語地理学的分析の三つの柱からなる。調査について、調査地点は北方方言の主要分析地点として山西･陝西両省の方言を選び、また江蘇省･浙江省･江西省などの方言を参考として調査する。分析は、単音節･二音節声調、基礎語彙、文法調査のための基本例文などを含む。声調を中心として分析するほか、音節･母音長等を測定しリズム指標（PVI）の分析なども行う。言語地理学的分析については、単音節声調や軽声･r化等、関連する事象の言語地図を作製し、言語地理学的分析を行う。また、軽声やr化に関する地図は語彙リストにおける頻度を考慮した分析も行う。

４．研究成果

（1）山西省沁源、同運城、陝西省西安、江蘇省揚州、浙江省温州、江西省分宜などの地域で単音節･二音節声調、基礎語彙、文法等の調査を行い、音声データを収集、音韻･音響分析を行った。また、『現代漢語方言音庫』所収の音声データについて、分析を行った。

中国の声調の分布について、3000 地点以上という今までの成果を大幅に上回る地点密度で描き、また今まで描かれていなかった声調の語頭子音や語末子音の相補分布を考慮した音韻的個数の分布を描き、その中国全体における声調変化の様相を考察した。音声的分布の地図では、最小1から最大 14 もの声調数が比較的なだらかに、北から南へと連続的に分布する様子がわかるが、音韻的声調数の場合、長江下流域に多く声調数の少ない方言が分布することがわかった。

（2）橋本萬太郎(1978 年)の中国語言語類型地理論について、最近の研究を用いて検証する。橋本の議論は近年で欧米や中国においてかえりみられる事が少ないが、中国語の形成を考察する上で避けて通ることはできないため、橋本以降の研究成果である『WALS』と『漢語方言地図集』を利用して橋本の議論が現在も意義のあることを示し、その上で独自の文献調査のデータに基づき中国語の韻律構造が北から南へと変化し、北部の方言ほど声調数が少なく、単語あたりの音節数の多くなることを示した。また、いくつかの基礎語彙を例に中国全土の分布図を作成し、マクロレベルでの語やその音声の変化の様相を検討した。

（3）山西省におけるr化の生起頻度を地図化し、その拡散の過程を考察した。山西省は北方方言の中では r 化の形成が遅れており、現在 r 化が進行している過程にあると考えられる。山西内部における r 化の分布は、主に北部･中部･南部の三地域に分かれ、それらの地域の境界付近には r 化語を持たない地域が分布している。それぞれの語彙には関連性も見られ、互いに関連を持ちながら r 化語が増加していることがわかる。

（4）軽声の生起頻度について全国地図を描き、軽声化の進行を考察した。軽声の生起頻度は北方方言において高く、南方方言では低い。北方方言においても山西方言や雲南方言では軽声化の進行が遅れている。軽声化の進行する地域の周辺には変調頻度の高い方言が分布しており、軽声と後字変調の関連がうかがわれる。

（5）北方方言において軽声化が遅れて進行する山西方言を例に、軽声化がどのように進行するのかを考察した。山西方言の北部と南部において軽声化が進むが、中部においては軽声が見られない地域が多い。一方で、中部の周辺では後字連読変調が見られ、軽声と地理的相補分布をなしていることから軽声の前段階として後字連読変調が位置付けられること可能性がある。山西省の変調には多様な類型が存在し、変調から軽声にいたる過程の多様性が知られる。

（6）世界の言語における中国語のリズム類型上の位置付けを確認した上で、リズムの指標となるPVIについて検討し、北京語と広東語が異なる類型に位置付けられることを見た上で、その中間に位置するいくつかの漢語方言を例に PVI 分析を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

①Kenji YAGI, Some Notes on Sun in Sinitic. *Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series No. 1 Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics* :90-97 頁（2016 年）

②Kenji YAGI, Takashi UEYA and Fumiki SUZUKI, “Wind” in Sinitic

Studies in Asian Geolinguistics IV — WIND —（8-9 頁）（2017 年）

③Kenji YAGI, Tone in Sinitic (Monosyllabic forms),

Studies in Asian Geolinguistics VII “Tone and Accent”（9-12 頁）（2017 年）

④八木堅二「学会展望（方言）」、『日本中国学会報』70 集:71－72 頁（2018 年）

⑤八木堅二「中国語方言韻律研究の言語類型地理論的課題」、『外国語外国文化研究』29 号 18-32 頁（2019 年）

〔学会発表〕（計７件）

①「Wind in Sinitic」

the 1st meeting, Academic Year 2016 Studies in Asian Geolinguistics at AA Institute（東京外国語大学）2016 年 11 月 鈴木史己、植屋高史と共著

②「Tone in Sinitic (Monosyllabic forms) 」

the 1st meeting, Academic Year 2017 Studies in Asian Geolinguistics at AA Institute（東京外国語大学）2017 年 8 月

③「山西省儿化的频度地图」

2017 年省別方言地図研究会（青山学院大学）2017 年 4 月

④「中国語方言韻律研究の言語類型地理論的課題」

2018 年外国語外国文化研究会大会（国士舘大学）2018 年 3 月

⑤「汉语方言轻声的频率地图」

2018 年日本中国語学会全国大会（神戸市外国語大学）2018 年 11 月

⑥「轻声的高精细度地图——以山西省的分布为例」

汉语方言比较和地理研究论坛（陕西師範大学）2018 年 12 月

⑦「汉语方言的 PVI 分析」

漢語方言史及び漢語類型論に関する若手研究者会議（国士舘大学）2019 年 2 月

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
https://agsj.jimdo.com/sag/

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。